

## 『源氏物語』における六条御息所の煩惱と苦しみについて

岡田大助

本稿は、日本倫理思想史研究の一環として、日本の代表的古典文学である『源氏物語』に表現されたその倫理思想を明らかにすることを目的とする。

『源氏物語』の倫理思想は、和辻哲郎の著した『日本倫理思想史』においては、おおむね「皇室尊崇の感情」のあらわれた文学作品の一例として取り上げられている。「皇室尊崇の感情」をはじめとする日本の代表的な倫理思想を古代から通史的に拾い上げ、その影響を追ってゆくという和辻の方法からすれば、古代に見いだされた皇室尊崇の感情が、中世の文学においてもあらわれていることを論証するということは、それ自体、何ら問題ではない。

しかし、にもかかわらず、我々は、そこに違和感を禁じえない。日本の倫理思想史と題する以上、我が国における代表的古典の一つである『源氏物語』から、もう少し何かを引き出すことができないだろうか。

『源氏物語』からは、他にもいくつかの倫理思想を読みとることができる。昨今の先行研究を踏まえつつ、その代表的なものをまとめると、次のようになるだろう。

### ①もののあはれ論

本居宣長によれば、『源氏物語』は、「もののあはれを知らせ」るために記されたものであるという。そこでは、「あはれ」という感情、すなわち、感情の動きの大きさがその価値の基準である。そして恋愛・とりわけままならない恋は、強く心を動かすものである。で、積極的に取り扱われている。このような思想の下では、道德的には悪とされる不義の密通すら、心を大きく動かすという観点から、肯定的に評価される。

ここから読みとることができる思想は、さしあたり、感情の動きを重視することに基づく、男女間の情念の肯定ということになる。

なお、このような「あはれ」という感情は、男女間の恋愛のみならず、別離の悲しみや、自然の四季折々の景観、宮廷生活の様々な儀礼などによってもひきおこされる。そしてそこに、美が見いだされる。このような立場は、恋愛をはじめとする、心を動かされるあらゆるものに、感動し、美を見いだしてゆく、美的観照の立場ということができる。

## ② 道德

一方、近世の儒学者・国学者、あんどうためあきら安藤為章によれば、『源氏物語』は、風論のために記されたものであるという。すなわち、もっぱら人情世態を述べながら、道德的善悪を、遠回しにさとすものであるというのである。なかでも彼は、『源氏物語』の大意は、「もののまぎれ」すなわち皇胤のまぎれを戒めるものであると理解する。すでに指摘されているように、儒学者の『源氏物語』解釈は、物語の文脈を無視した牽強附会的解釈が多い<sup>一</sup>。しかし、この皇胤のまぎれの戒めという説は、物語に内在する文脈をしっかりとふまえたものである。すなわち、藤壺の宮と密通して子をなし、その子を帝位につけた光源氏が、その晩年において、妻女三宮と柏木に密通され、その子を授かって、往年の罪の報いを受けるというすじみちは、物語に内在する大きな文脈として疑いようがない。そして、そこから、道德的な戒めを読みとるというのも、否定しがたいものである。宣長は否定しているものの、宣長を先師と仰ぐ萩原広道はぎわらひろみちすら、この点については安藤説を採用している。『源氏物語』には、一面において、こういった道德的な戒めという筋道もふくまれているといわねばならない。

## ③ 仏教への関心

ところで、もののあはれを知ることに基づく男女間の情念の肯定

(①)と、道德的な戒め(②)は、ときに深刻な矛盾をきたす。藤壺の宮や空蟬など、『源氏物語』において肯定的に描かれる人物の何人かは、もののあはれを深く知る心と、高い道德的常識の両方を併せ持つ。もののあはれを深く知るがゆえに、同様にそれを深く知る相手と恋愛関係となるが、高い道德的常識を持つゆえに、その恋愛を、自らの良心にとがめられる。そして、両者の深刻な矛盾のはざままで苦しむことになる。

そこで、そのような苦しみから逃れる道として、人生苦とそこからの解脱解放を説く仏教に関心がもたれる。男女のままならぬ恋愛の苦しみは、愛別離苦の苦しみを説く仏教の教説と対応する。

また、主人公光源氏は、幼い頃から、愛する人との死別を繰り返して、厭世感を深めてゆく<sup>二</sup>。そして、その人生の最後には、最愛の人、紫の上に先立たれて、次のように述懐する。

いはけなきほどより、悲しく常なき世を思ひ知るべく仏などの勧めたまひける身を、心強く過ぐして、つひに來し方行く先も例あらじとおぼゆる悲しさを見つるかな、今は、この世にうしろめたきこと残らずなりぬ、(以下略(「御法」四一五二三(引用は、小学館『新編日本古典文学全集』に拠る。以下同。))

光源氏は、最愛の人、紫の上に先立たれた後、自らの人生を振り返って、悲しく、常が無いということを思い知るために、仏などが勧めなされた身であるという。ここでいう悲しみ、無常とは、紫の

上との別れに代表されるように、愛する人との死別の悲しみのことであろう。幼き頃よりとあるのは、そのような死別を、母との死別をはじめ、祖母、夕顔、葵の上等、数多く経験してきたことをいうのであろう。光源氏は、自らの人生を、そのような死別の悲しみの積み重なったものと総括したのである。そして、このような悲しみは、仏教の教説に照らせば、諸行無常の苦しみ、あるいは、愛別離苦に相当する。主人公光源氏は、その最晩年にいたり、ついにそのことをさとり、出家へと向かったという。

このような筋道を重視すると、光源氏の生涯を描いた『源氏物語』の大部分は、主人公が、諸行無常、愛別離苦という人生苦の実相をさとって出家するにいたる一編の長大な仏教説話とも読める。宣長は否定するものの、『源氏物語』には明らかに、仏教思想も表れているといわねばならない。

このように、『源氏物語』には、皇室尊崇の感情のみならず、もののあはれ論、道德、仏教といった、多種多様な倫理思想が表れている。なかでも、他の著作に優れ、今日においても影響力が強いのは、宣長の言うもののあはれ論であろう。しかし、作者、紫式部は、宣長のように、儒教や仏教と対立軸を構成して自らの思想を展開するような書き方をしていない。そして、これまで見てきたことが示しているように、彼女は、宣長が否定する仏教や儒教について肯定的に捉えていた。紫式部は、〈あれかこれか〉つきつめてゆくのではなく、〈あれもこれも〉というような描き方をしている。そこには、「もののあはれ」が尊ばれているだけでなく、当時の多

種多様な倫理思想が豊富に含まれているのである。

### 〈問題関心〉

さて、このように宣長の解釈を相対化し、『源氏物語』の倫理思想の多様性を押さえた上で、論者の問題関心にに基づき、本稿で扱う問題の焦点を絞りたい。

まず、もののあはれ論については、宣長の著作をはじめとして、すでに優れた先行研究が数多く存在する。よって、ここでは問題としない。また、道德思想については、『源氏物語』にもその表れを見ることが出来るものの、この点については、近世の儒学者達の著作等、それ以上に優れた著作が思想史上数多く存在する。また、『源氏物語』研究に限定しても、江戸時代には、儒学者による研究が数多くなされている。儒教を専門外とする論者が、取り立てて触れるべきではないだろう。

次に、仏教思想について見てみよう。和辻哲郎は、若い頃より仏教思想に関心を持ち、『原始仏教の実践哲学』をはじめ、いくつかの著作やノートを残している。だが、それらは主に仏教の哲学的・観念的な側面に光を当てるものであった。一方、和辻は、その著『日本倫理思想史』において、『源氏物語』をはじめ、多くの物語を取り上げている。だが、そこに描かれている仏教思想に注目することはほとんどない。しかし、仏教思想には、哲学的な側面のみがあるのではない。その思想の拠り所である經典からして、説話や物語

が記されたものが数多く存在する。その後、我が国がそれを受容した後にも、仏教は、『源氏物語』に二百年ほど先行する『日本霊異記』や『源氏物語』より百数十年後に記された『今昔物語集』など、多くの著作において、説話形式で説かれてきた。そして、『源氏物語』も、すでに見てきたように、その仏教的な側面に注目するなら、一編の長大な仏教説話とも読めるのである。

以上を踏まえ、日本倫理思想史研究のなかでも仏教を専門とする論者は、『源氏物語』に表れた仏教思想の具体的な側面を明らかにしたい。なかでも、本稿では、『源氏物語』において、その具体的な描写という点でとりわけ優れていると見られる六条御息所の様々な煩惱と、そこからもたらされる苦しみに焦点を当て、その内容を明らかにすることを目的とする。

### 〈煩惱の形式的定義〉

はじめに、仏教における煩惱について、後の解釈に関わる範囲で、その形式的な内容を確認しておくことにしよう。

煩惱とは、読んで字のごとく、煩わせ悩ますという意味である。心身を苦しめ煩わす精神作用の総称である。

ところで、よく知られているように、仏教は、四諦説、すなわち、四つの真理を説く。すなわち、苦諦（生老病死、愛別離苦などの人生苦）、集諦（その原因としての煩惱）、滅諦（それを滅ぼした境地があるということ）、道諦（その為に行う、正しい道（八正道）

があるということ）である。この四諦説に即していえば、煩惱は、人生苦の原因として滅するべきものとして位置づくことになる。

煩惱の最も代表的なものは、貪欲（むさぼり）、瞋恚（いかり）、愚痴（おろかさ）である。これらは、三毒と呼ばれる。他にも、多種多様な煩惱があるとされ、通例、一〇八の煩惱といわれる。

煩惱は、様々な言葉に言い換えられて説明される。

例えば、煩惱は「取」と言い換えられる（『俱舍論』）。「取」とは、執着、すなわち、欲してやまないところのはたらきのことである。『源氏物語』における煩惱といえば、まずこの執着が想起される。なかでも、男女の情愛を中心として展開する『源氏物語』においては、男女間の執着である愛執が、とりわけ大きな問題となる。愛執とは、貪欲の一つである愛欲とほぼ同義であり、深く妻子などを愛することである。後述するように、光源氏に強く執着する六条御息所の代表的な煩惱といつてよいだろう。

あるいは、その高い教養に基づき、自らの運命をいわゆる宿世として自ら引き受けようとする御息所は、現世のみならず、遙かな過去世から、死後に至るまで、自己を実体的に捉える傾向が顕著である。このような捉え方は、仏教では「我執」といわれる。

また、自尊心の高い六条御息所を特徴づける煩惱として、「憍慢」を挙げることができる。「憍」とは、おのれの性質（美貌や若さや血統や学識など）をすぐれたものと考えて自己に執着する心のおごりのことであり、「慢」とは、他人と比べて、相手よりは自分がよいと思うことである。

では、これらのような煩惱は、六条御息所において、どのように現れているのであろうか。またそれらは、どのようにして苦しみと成ってしまうのだろうか。

### 《愛執》

六条御息所は、「六条わたり」の女として物語に登場する。

六条わたりも、とけがたかりし御気色けしきをおもむけきこえたまひて後、ひき返しなめならんはいとほしかし。されど、よそなりし御心まどひのやうに、あながちなることはなきも、いかなることにかと見えたり。女は、いとものをあまりなるまで思ししめたる御心ざまにて、よはひ齡のほども似げなく、人の漏り聞かむに、いとどかくつらき御夜離れよがの寝ざめ寝ざめ、思ししをるることいとさまざまなり。〔夕顔〕——一四七

ここで第一に注目したいのは、はじめはむしろ源氏の求愛を受け入れることに抵抗していた六条御息所が、ひとたびその求愛を受け入れるや、源氏に、夜離れを嘆くほどの強い思い入れを抱くに至っていることである。ここに、我々は、六条御息所の源氏への愛執を見て取ることができる。

一方、源氏のほうは、ひとたびなびかせるや、夢中になることもなく、夜離れがちの軽い扱いをするようになる。六条御息所からす

れば、はやくも心変わりされてしまったということになる。仏教の用語で捉えると、無常であるといえよう。

そして、今では、源氏の夜離れを「つらき」と嘆いている。これは、仏教でいえば、愛する人と離れなければならない愛別離苦の苦しみを味わっているということになる。<sup>五</sup>

このように仏教の用語で捉え返してみると、この部分は、人がこれこそが自らの拠り所であると思つて何かに執着すると、それが無常ゆえに頼りにならず、かえつてその執着する対象と離れる苦しみを味わわなければならないという、典型的な仏教の教説と対応しているのを見て取ることができる。

このような六条御息所の源氏への強い愛執と、愛別離苦の苦しきは、その後の物語においても、いたる所に見いだすことができる。例えば、御息所は、「葵」の巻において、相変わらず夜離れがちの源氏に対して、異例の女からの贈歌として、次のように詠んでいる。

袖そでぬるるこひぢとかつは知りながら

下り立つ田子たこのみづからぞうき〔葵〕二—三五

この歌には、あたかも田子がずるずると泥田にはまり込んでゆくように、深みにはまり込んで抜け出すことのできない、思いを遂げられぬ恋の苦しさ、そして、それを誰のせいにもせずに、自らのつたない宿世の故とひきうけ、ため込んでゆく苦しさがよく表れている。

る。このような恋の苦しみを重層的に表現しえているゆえであろう、「物語中第一の歌」(『細流抄』)とさえいわれる。今は、愛執という点に注目すると、この歌には、彼女の源氏に対する無限ともいえるような強い愛執の念を見て取ることができる。

あるいは、「若菜下」の巻において、彼女が死霊となって紫の上にとりついていたときには、調伏されてその正体を現し、源氏に次のようにいう。

おのれを、月ごろ、調じわびさせたまふが情けなくつらければ、同じくは思し知らせむと思ひつれど、さすがに命もたふまじく身をくだきて思しまどふを見たてまつれば、今こそ、かくいみじき身を受けたれ、いにしへの心の残りにこそかくまでも参り来たるなれば、ものの心苦しさをえ見過ぐさでつひに現はれぬること。さらに知られじと思ひつるものを(『若菜下』四—二三五)

一般に、死霊というものは、生者に怨みがあつて、その怨みを晴らすために、相手の下に現れるものである。<sup>六</sup>ここで、御息所の死霊は、常日頃、光源氏に祈り伏せられて苦しめられたことに対して、そのことを「思し知らせむ」と思っているという。これは、単にその苦しみを知って欲しいということではなく、怨み、仕返しをしようということであろう。しかし、引用部分の少し後に記されているように、源氏本人は神仏の守りが強すぎて、直接たたることができな<sup>七</sup>い。それゆえ、次善の策として、光源氏が愛する紫の上にとりつ

き、源氏を苦しめていたという。ここでの御息所の死霊は、さしあたり死霊の一般的な様相に対応している。そして、怨むとはそもそも、強い愛執の裏返しである。強く愛するからこそ、それが満たされない<sup>七</sup>と、怨むのである。ここには、まず、死霊となって怨むほどの、源氏への並外れた愛執がよく表れているといえる。

しかし、ここでさらに注目したいのは、その後御息所が、源氏への強い愛情ゆえ、その正体を現し、それ以上源氏を苦しめることを放棄しているということである。すなわち、一旦紫の上にとりつき、彼女を死の直前まで衰弱させた後、御息所の死霊は、光源氏が命が耐えられないのではないかと心配されるほど我が身を削って思い惑っているのを見て、かつて強く愛した心が残っていてここまできたものである<sup>八</sup>ので、光源氏の苦しさを見過ぐすことができずに、その正体を現してしまったという。ここには、死霊となつてなお、源氏の苦しむことには耐えられないという、愛執の裏返し<sup>九</sup>の怨みをさらに越えた、源氏への愛情がよく表れているのである。

このように、『源氏物語』は、単純に怨むというだけではなく、死霊となつても源氏を思いやつてしまうというかたちで、それ以上に深い、源氏への愛情を表現することに成功している。まずこの点に、『源氏物語』の優れた点を見いだすことができる。

さらにいえば、ここでは、単に怨むだけでなく、単に愛するだけでもなく、その両者のはざままで葛藤する六条御息所の苦しみを描き出しているということもできよう。このような葛藤と、それが可能にした重層的な煩惱の苦しみの表現も、他の仏教説話にはほとん

ど見られないものである<sup>八</sup>。

ところで、この後、御息所の死霊が源氏への怨みを越えた愛情に気づき、それで満足するという筋道であれば、このような愛情の発見は、御息所の救済につながるものであったかもしれない。しかし、道徳的には肯定されるような愛情もまた、仏教からすれば、愛執の一つのかたちに過ぎない。御息所は、その後も死霊となつて、源氏を苦しめるために現れている。つまり、両者の葛藤は、救済にはつながっていない。そしてここに、我々は、御息所の煩惱・愛執の無限のなさ、すなわち、煩惱の無限性を見て取ることもできる。

### 〈高い身分と教養〉

次に注目したいのは、我執と嬌慢である。では、それらの煩惱は、どのようにして形成されたのだろうか。まず、その背景となる、高い身分と教養について、押さえておくことにしよう。

御息所は、「夕顔」の巻において、その邸宅の庭の「木立、前栽」が通り一遍でなく、そこを「のどかに心にくく」すなわち、落ち着いて奥ゆかしく住みなしているとされる。ここに暗示されているように、彼女は、源氏の身分にふさわしいほどの高い身分と深い教養を併せ持つ恋人として登場する。

その高い身分については、「葵」の巻において、「前坊」の姫宮を産んだ御息所という、よりはっきりした規定を与えられている。「前坊」とは、「東宮在位中夭折したもの」(藤本勝義「前坊」)のこ

とであり、御息所とは、その後であるということである。あるいは、同じ「葵」の巻では、しばらく後に、その父が「故父大臣」といわれている。ここから、その父が大臣であったことが知られる。さらに、「賢木」の巻では、その父大臣が、国母にとの志をもって、彼女を大切に養育したことが記されている。彼女は、大臣にまでなつた父の後見のもとに大切に養育され、東宮妃となり、その姫宮を持つまでになっていたのである。そしてその後も、彼女は、東宮と仲の良い兄弟であつた桐壺帝に、常に気をかけられる存在であつた<sup>九</sup>。当時の日本の貴族の女性として、おおよそ考えうる最高の栄華は、大臣の娘として天皇の妻となり、男子を産んで次の天皇の母になることであつたが、彼女は、その少し手前まできていたのである。

彼女の高い教養については、源氏が彼女を評するときに、幾度となく言及される。例えば、「葵」の巻において、例の車争いのことを聞いた源氏は、御息所を評して「よしありておはするものを」という。よしありとは、趣味教養が高いということである。また、「絵合」の巻において、源氏は彼女の死後、彼女のことを回想して、「よしありし方はなほすぐれて」と、そのとりわけ優れた趣味教養を惜しんでいる。あるいは、若菜下において、紫の上に過去に関わつた女性の特徴を語る場面では、「中宮の御母御息所なむ、さまことに心深くなまめかしき例にはまづ思ひ出でらるれど」という。普通と異なつて趣きが深く、優雅、優美であつたということである。これも、趣味や教養の高さから来る美を褒め称えたものである。そして、このような高い趣味教養は、彼女のとりわけすぐれた

筆跡に表れているという<sup>+</sup>。

### 《我執》

このような高い身分と深い教養は、彼女の奥ゆかしい性格を作り上げた。その性格は、例えば、「夕顔」の巻において自宅に奥ゆかしくすみなしている様や、葵祭りの見物の際に、その車が「いたうひき入りて」「ことさらにやつれたる」様子をしていたところに暗示されている。彼女はその身分と教養の高さゆえ、容易に姿を外に現さない。このような奥ゆかしさは、当時、それ自体、貴婦人のあるべきありようとして尊ばれていた。

そして、奥ゆかしさは、単に外面的なことではなく、内面の感情を容易に見せないということでもあった。したがって、このような奥ゆかしさは、徹底すると、内向し、自閉する性格へと連続する。

例えば、彼女は、心の底では源氏に表だつた扱いを求めているも、年齢がふさわしくないこともあり、その奥ゆかしさから、自らそのことを相手にいうことができなかった。彼女は、「うちとけ」ることにおいて源氏の愛情をその身に集めた夕顔とは対照的に、「うちとけ」ることができないのである。

また、彼女は、源氏がどれほど軽い扱いをしても、相手を責める前に、それを自分の宿世のつたなさとして、自らに引き受けようとする。それは、苦しみを内にため込み、物思いを深めることにつながってしまう。

あるいは、車争いで恥をかかれたあげく、源氏にまで無視されてしまった御息所は、独りで次のように詠う。

影をのみみたらし川のつれなきに

身のうきほどぞいとど知らるる（「葵」二二―二四）

彼女が物語で歌う初めての歌が、常識的な唱和ではなく、例外的な独詠歌であつた<sup>+</sup>というのは、その孤独な内向性を暗示している。そして、源氏のつれなさを、「身のうきほど」と自ら引き受けるところが、いかにも自閉的である。そしてこれは、前節で引いた歌で、「みずからぞうき」と結んでいることも、照応する。

これが、若い頃の紫の上であれば、すねてうつぶせになつてうらみごとの一つもいって、源氏のより一層の愛情を引き出し、それである程度すんでしまふところである。しかし、御息所は、その奥ゆかしさゆえ、自らの思いを相手にぶつけることができない。そして、悩みを自らにため込み、その物思いを深めてゆくのである。

このような、奥ゆかしさがもたらす内向性、自閉性は、むしろすぐれた教養のもたらすものとして、貴婦人としてのあるべきありようになつてゐる。相手を責めずに、自らの行いがもたらした運命であると引き受けるのは、いわゆる「反求」であり、道徳的に見て優れたふるまいである。あるいは、仏教に照らすなら、いわゆる因果応報の道理をよく知っているためであるともいえる。

しかし、仏教の縁起という立場に立つて見ると、それは「我執」



であるといえる。縁起とは、あらゆるものは相互によりあつて存在しているということである。にもかかわらず、自らの運命を、自らの過去からのものと引き受けようとすることは、自己という固定的実体的なものが過去から連続していると考え、それに執着しているということになる。縁起の立場からすれば、そのようなものは実際には存在しない。にもかかわらず、そのようなものに固執すれば、実体的ではない自らの罪を自らの罪と固定的に考え、その思い込みが、自らを苦しめることになってしまう。そうであるから、彼女のように何でも自己に引き受ける立場は、事実にして、確かにないものを確かであるとみて、苦しみを産みだしているにすぎないということになる。<sup>十二</sup>とはいえ、では因果応報は無いと居直ればいかといえそうではない。仏教では、因果を知った上で、罪を犯しても、慚愧によって救われるという。<sup>十三</sup>慚愧とは、慚は自らの罪を自らの心に恥じ、愧は、自らの罪を人に告白してその許しを請うことである。確かに、御息所が自らの宿世のつたなさを嘆いていることは、自らの罪を自らに恥じていることであり、慚愧であるともいえる。しかし、一人で嘆いている彼女には、縁起の理法を教え、その慚愧を受け止めてくれる相手、すなわち善知識が欠けているのである。

### 〈橋慢〉

彼女の高い身分教養は、また、彼女の自尊心を高くしたと考えられる。

例えば、いわゆる車争い直後の源氏の評では、「心ばせのいと恥づかしく」といわれる。これは、源氏が恥づかしくなるほど人柄が優れているという意味だが、誇りが高いということでもある。あるいは「若菜下」の巻の評でも「心ゆるびなく恥づかしくて」と、油断できず気詰まりであつたとされる。これも、その自尊心の高さゆえである。

このような自尊心の高さは、仏教の言葉でいえば、橋慢となる。橋慢とは、すでに触れたように、様々な点で、他人と比べて自らを上とみる慢心のことである。

そして、高い自尊心・橋慢は、彼女を、とりわけ外聞を気にする性格にしたといえよう。すでに引いた、「夕顔」の巻で彼女の性格を示す引用箇所において、彼女は源氏に軽く扱われているのを「人の漏り聞かむ」ことを気にしていた。また、「葵」の巻では、源氏のいいかげんな扱いを、「世の中の人も知らぬなりにたるを、中略、いみじう思し嘆きけり」とあつた。あるいは、例の車争いにおいても、人目を忍んでいたにもかかわらず、それを人々に知られてしまったことを非常に悔しく思っていた。また、後に「若菜下」の巻において、死霊となって登場するときにも、紫の上の前で源氏が悪口をいったことをひどく気にし、そのことをきっかけとし

て、紫の上を苦しめるに至っている。御息所は物語を通して、一貫して、外聞を強く気にする性格として描かれているのである。

このような、自尊心の高さ、そして、外聞を気にする性格は、常識的に考えれば、その人の性格の一つであり、とりたてて悪であるのではない。しかし、仏教的に見ると、それは自らを苦しめる嬌慢という煩惱と、それがもたらす性格であり、したがって、悪であるということになる。そして、このような慢心は、諸行無常なるがゆえに必ず打ち砕かれ、かえって苦しみの原因となるというのが、仏教の教説である。『源氏物語』に描かれる六条御息所もまた、このような慢心が必然的に苦となる構造にぴたりとあてはまる。

御息所は、自らを後見してくれる父と、夫であった東宮に、相次いで先立たれ、その栄華の裏付けを失う。それでも、大臣に大切に養育された前坊の御息所として、高い教養に裏打ちされた自尊心は、そのまま残っている。しかし、その没落したという現実、やがて何らかのかたちで突きつけられるはずである。『源氏物語』において、その決定的な事件となったのが、例の車争いであった。そこで御息所は、光源氏の正妻で、時の大臣の娘であった葵の上の従者に、車をどかされ、壊された挙げ句に、蔑まれる。そこで、彼女はかつてはおそらく歯牙にもかけないほど下に見ていた相手に、今では少なくとも権勢において、自分がまるで太刀打ちできないほど下であるという現実をつきつけられてしまう。ここに、その高い自尊心は、ずたずたに傷つけられ、以降、その人聞きの悪さを、ひどく気にし続けることになる。このように、高い自尊心・嬌慢は、諸

行無常なるがゆえに、自尊心を傷つけられ、外聞を気にし続けなければならぬというかたちで、苦しみとなってしまったのである。

### 〈生霊〉

『源氏物語』に描かれる六条御息所の嬌慢という煩惱がもたらす苦しみは、さらに、ここから独自の深みへと踏み込んでゆく。

車争いをきっかけに、彼女のもの思いは深まり、以前はさほどもなかった「いどみ心」すなわち競争心が高まったという。競争心とは、単純に言えば、競争に勝って相手の上に立ちたいということのことであり、仏教でいうところの嬌慢の煩惱に通じるものである。車争いで、貶められ、その自尊心を深く傷つけられた御息所は、相手を何らかのかたちで傷つけ、貶めることで、その鬱憤を晴らしたいとの思いが生じたのである。

もの思ひにあくがるなる魂たましひは、さもやあらむと思し知らるることもあり。年ごろ、よろづに思ひ残すことなく過ぐしつれどかうしも砕くだけぬを、はかなきことのをりに、人の思ひ消けち、無きものにもてなすさまなりし御禊みそぎの後、一ふしに思し浮かれにし心鎖しづまりがたう思さるるけにや、すこしうちまどろみたまふ夢には、かの姫君と思しき人のいときよらにてある所に行いきて、とかくひきまさぐり、現うつにも似ず、猛たけくいかきひたぶる心出て来て、うちかなぐるなど見えたまふこと度重たびかさなりけり。あな心憂こころうや、げに身

を棄ててや往にけむと、うつし心ならずおぼえたまふをりをりもあれば、さらぬことだに、人の御ためには、よさまのことをしも言ひ出でぬ世なれば、ましてこれはいとよ言ひなしつべきたよりなりと思すに、いと名立たしう、ひたすら世に亡くなりて後に恨み残すは世の常のことなり、それだに人の上にては、罪深うゆゆしきを、現のわが身ながらさる疎ましきことを言ひつけらるる、宿世のうきこと、すべてつれなき人にいかで心もかけこえじと、思し返せど、「思ふもものを」なり。（「葵」二―三六―三七）

例の車争いで、まるで人で無いような扱いをされ、その高い自尊心を深く傷つけられた御息所は、どうにもおさまりがたく、少しまでもんだ夢のなかで、葵の上のもとに赴いて、彼女をあちこちに引きずり回し、弄び、荒々しく恐ろしいひたむきな心が生じて、乱暴にむしり取ったりなどしているという。ここで、彼女が強い自制心によって押さえ続けてきた怒りの煩惱は肥大化して制御不能となり、生霊となって自制心の制御から離れ、その剥き出しの暴力性を露わにしている。

このような怒りの感情に身を任せることは、まずはそれ自体、非常な苦しみであつたはずである。また、このような感情に支配されることは、強い自制心や高い自尊心を持つ彼女にとって、それらと矛盾するという意味でも、大きな苦しみであつた。さらに、このように生霊となり、それが悪い評判となることも、外聞を気にする彼

女にとっては、その羞恥心と矛盾する、非常な痛みを伴うものであつた。

ここで紫式部は、生霊というフィクションを導入することで、生身の人間につきまとう自制心の制御を離れた、霊魂ならではの剥き出しの情念・煩惱を、生きた登場人物に即してありありと描き出している。さらに、それを自制心や自尊心の強い六条御息所という人物に即して描くことで、それらの煩惱と、一方で正気の六条御息所に残る自制心や自尊心、あるいは羞恥心との葛藤を生じさせ、その葛藤の苦しみを重層的に描くことに成功している。<sup>十四</sup>

このような煩惱と自制心等との葛藤の表現は、近代の小説などに馴染んだ今日の我々の目から見れば当たり前にも見える。しかし、例えばしばらく後に記された『今昔物語集』においては、男に捨てられた女が、死霊や生霊となつて、その怨みを晴らす説話がいくつか描かれているが、そこで登場する霊魂は、自らを裏切った相手への怨みの心で一貫しており、そこに自制心や、それとの葛藤は描かれていない。あるいは、少し前に描かれた『日本霊異記』の登場人物も、欲や怒りといった煩惱に囚われたものは、一貫して煩惱に囚われたまま悪をなし、そのまま悪報を受けているというものが多い。一方で、その後反省して救われるというものもいくつかあるが、それは報いを受けた後の話であり、そこにいたるまでに、煩惱と自制心との葛藤は描かれていない。また、『日本霊異記』においては、煩惱から悪事をなしたものが、一方で経典を誦誦するといった善をなしているというように、善悪両方の心を併せ持つも

のを扱う説話もいくつかある。しかし、それらは結果として、両方の報いを受けつつも、総量としては助かるという話である。そこで問題となっているのは、善悪の総量とその報いであって、煩惱と自制心との葛藤ではない。

これらほぼ同時代の代表的な仏教説話と比べると、同一の登場人物に、靈魂なればこそその剥き出しの煩惱と、それに対するブレーキであるところの、強い自制心をほぼ同時に持たせ、その両者の葛藤を具体的に表現していることは、『源氏物語』に独自のものであるといつてよいだろう。

### 〈まとめ〉

本稿では、『源氏物語』に表れた仏教思想を明らかにするという問題関心の下、六条御息所の煩惱とその苦しみと焦点をしぼり、それらの内容を辿ってきた。まとめておこう。

御息所が抱いていた源氏への強い思いは、仏教の言葉でいえば愛執である。それは諸行無常なるが故に、苦しみとなる。しかし、御息所の源氏への愛執は非常に強く、彼女は、満たされないと分かっているにもかかわらず、その恋の苦しみの際限なき深みにはまり込んでいった。その死後も、御息所は、源氏への怨みをはらすために、死霊となつて源氏の愛する女にとりつき、苦しめようとする。これは、満たされなかった強い愛執の裏返しである。だが、その後、源氏が苦しむのを見ると、生前の愛情ゆえに、それ以上苦しめるのを止めて正体

を現す。しかし、その後もまた、怨霊として源氏を苦しめに現れる。このような怨みとそれを越えてゆく愛情の際限なき葛藤は、煩惱の無限性をよく表している。

また、彼女の深い教養と奥ゆかしさから生じる、内向、自閉する性格は、思いを遂げられない恋にはまり込むという不幸な運命をつたない宿世のゆえと自ら引き受けようとする。これは、道徳的には優れたふるまいであるが、仏教の縁起説に立てば、自らの魂を固定的実体的なものと捉える我執の心であり、かえって自らを苦しめる煩惱にすぎない。

あるいは、その高い身分と教養がもたらす自尊心の高さは、仏教的に言えば傲慢の心である。その自尊心・傲慢の心は、諸行無常なるが故に傷つけられ、かえって苦しみの原因となる。車争いによって競争心を駆り立てられた彼女は、蔑まれたことに対する怒りの煩惱を自制心で抑えることができず、生霊となって自制心の制御を離れ、相手を暴力的に痛めつける。それは彼女にとっては、怒りやねたみといった煩惱に飲み込まれる煩惱それ自体の苦しみであると同時に、その高い自制心や自尊心と矛盾する苦しみであり、さらに、そのことが悪評となり、その自尊心、羞恥心とも矛盾する、三重の苦しみである。

本稿での考察によって、『源氏物語』における煩惱の表現が、日本のほぼ同時代の主な仏教説話と比べて、煩惱を多面的、重層的に描いてその苦しみをより具体的に表現しえた画期的なものであることが理解される。これらは、日本の倫理思想史上の優れた成果とし

て、改めて評価すべきであるといえよう。

最後に、本稿で詳しく取り扱う余裕はなかったが、その救済についても簡単に触れておこう。結論から言えば、『源氏物語』において、六条御息所の救済は、はっきりと描かれていないと言わなければならない。確かに、彼女はその死の少し前には、仏教において非常に功德が高いと言われる出家をしている。しかし、その後も強く源氏のことを思い続け、その死後は苦界に落ち死霊となっている。その出家によって、直ちに成仏したとは考えにくい。また、今日における六条御息所についての代表的研究者・藤本勝義は、娘の追善供養によって成仏する方途を確実にしたとする踏み込んだ解釈をしている<sup>六</sup>。しかし、その後の御息所がどうなったのか全く記されていない以上、それは推測の域を出ない。『源氏物語』においては、救済について、むしろ、はっきりとその筋道をつけることができなかったというべきである。物語に登場する他の女性達と比べれば、御息所は、その最後の登場まで死霊・悪霊となって跳梁しており、むしろその救われなさが際立っているからである。ただし、大乘仏教では、たとえどれほど罪深いものであっても、すべての生きとし生けるものは、やがて仏の覚りを開くとされる（『涅槃経』）。仏教によれば、悠久の時間のなかで、六条御息所は必ず救われるはずである。出家の事実と、娘の心からの追善供養、そして、仏性の現れともとれるような自制心・慚愧は、そのきっかけとしては、十分すぎるものであるといえよう。

## 註

一 例えば、本居宣長は、江戸時代の代表的な儒学者の一人である熊沢蕃山の『源氏物語』解釈・『源氏外伝』に対して、「此外伝といふ物のやう、物語の巻々の中の詞を、つぎ／＼にすこしづ、つみ出て、文の意にもか、はらず、たゞおのがいはまほしき、儒者ごとを、心にまかせていへる物にて、中にはおかしき事も、まれにはまじりたれども、すべていとみだりなること也」（『源氏物語玉の小櫛』二の巻）という。また、野口武彦「江戸儒学者の『源氏物語観』」熊沢蕃山『源氏外伝』をめぐって（『文学』岩波書店、一九八二年七月号）参照。

二 光源氏の厭世観は、ほかに、藤壺との恋のままならなさや、六条御息所の情念の凄まじさへの嫌悪感などから、深まってゆく。仏教の教説に即して言えば、前者が愛別離苦に、後者が怨憎会苦に対応する。

三 バリー「律蔵」大品、早島鏡正『ゴータマ・ブッダ』（講談社学術文庫、一九九〇年）参照。

四 『源氏物語』において、執着を意味する「執」については、全部で四例ある。また、男女の愛着を意味する「愛執」は一例ある。それらの用例と内容については、鈴木日出男「愛執の罪―誰の救済か」（『別冊國文学』源氏物語テキストツアー、学燈社、二〇〇〇年）参照。

五 鈴木前掲論文（註四）によれば、「つらし」とは、「自分のつらさは相手のせいだとして怨む気持ちである」という。そうであるとすれば、ここでの嘆きは、単純に愛する人との離れなければならないことを嘆いているのではなく、自分のつらさを源氏のせいとして怨む気持ちでもあるということになる。また、ここでのつらさは、後述するように、外聞を気にする御息所にとっては、年齢不相応の若い恋人に軽んじられ、その外聞を傷つけられた苦しみでもあるだろう。しかし、ここでの「つらき」は直接には最後の「御夜離れの寝覚め寝覚め」にかかっており、夜離れ自体の苦しみでもあることは疑いない。

六 例えば、少し後の時代の『今昔物語集』においては、夫に捨てられて死んだ妻が悪霊となって怨みをはらすべく夜な夜な男を探しているという説話がある（『人の妻悪霊と成り、其の害を除く陰陽師の語』（巻二四）第

二〇)。また、先行する『日本霊異記』には、死んで冥界にいる女が、まだ生きている男を怨み、冥界に呼び寄せる話が二例ある。第一に、生前、男に捨てられた女の霊魂が、死後の世界から恨みをはらそうと、閻魔王に頼んで、夫を一旦死後の世界に連れて来させる説話(「非理に他の物を奪ひ、悪行を為し、報いを受けて奇しき事を示しし縁」(上巻―第三十)、第二に、出産で死んだ妻が、死後、その苦しみを分かち合おうと夫を冥界に呼び寄せる説話(「閻魔王の奇しき表を示し、人に勧めて善を修せしめし縁」(下巻―第八))である。これらは、死霊となって男の下に訪れるわけではないが、死者の霊魂が怨みを晴らそうとして生者にはたらきかけてくるといふ点で、相通じるものであろう。

七 この点については、「女の執念が凝つて蛇となる話」(『今昔物語集』巻十四―第三)が参考になる。いわゆる道成寺や安珍清姫伝説に連なる話である。そこで女は、男を強く愛したが、その愛を拒まれ、その愛が満たされなかったために、男を強く怨み、死んで後蛇となって男を追い、ついに殺してしまふ。ここでの怨みは、強い愛執の裏返しであるといえる。

八 例えば、『今昔物語集』「本朝世俗部」においては、多くの死霊に関する説話があるが、それらに登場する死霊は、生者を怨むか(註六参照)、愛するか(「人の妻、死にて後、本の形と成りて旧夫に会ふ語」(巻第二七―第二四))で一貫しており、両者を併せ持つて葛藤するという事例はない。

九 『六条御息所』(『人物で読む源氏物語』(第七巻)、勉誠出版、二〇〇五年)「人物ファイル―六条御息所」8 人間関係②参照。

十 同前、10 筆跡、紙選び参照。

十一 武者小路辰子は、「源氏物語で述べられている六条御息所の最初の歌は独詠歌だった。このことは多くの女性の中でもこの女君のみの一つの特色といえる。六条御息所は最初からなやめる女君としてあったのだ」という。「六条御息所―その声から」(森一郎編『源氏物語作中人物論集』所収論文、平成五年、勉誠社)参照。

十二 親鸞『教行信証』にも引かれる『涅槃経』「梵行品」には、自らの犯した父殺しの罪の報いで、地獄に行くことを恐れる阿闍世王に、釈迦が縁起・空の理法を説いて、それが執着の一種であることを教示したところ、阿闍世が救われる場面が描かれている。

十三 前註で取り上げた阿闍世王の救済は、罪の報いに恐れる阿闍世王を、釈迦に帰依する大臣である耆婆が、慚愧であるとして褒め称えるところから始まっている。

十四 竹西寛子は、このような矛盾に苦しむ御息所について、葵の上の死後、それをいたわる六条御息所の手紙への返事に、御息所の生霊化を知ったことをほのめかした源氏からの手紙をそれと見た「心の鬼」に注目して、次のように指摘している。「この「心の鬼」には、抑制し、物事に耐え得る強い理性もありながら、なおそれを斥けるだけの情念をもつて調和を失った自己の、条理いずれにも責任をもたなければならぬのにもちかねている者の哀しそうな足摺りを見る思いがする」と指摘している。本稿に先行し、この矛盾を捉えているという点で、参考になる。ただし、本稿では煩悩と自制心との矛盾と捉えているのに対し、情念と理性の矛盾としている点で異なる。「心の鬼」(『竹西寛子著作集 第二巻 評論(古典)』平成八年、新潮社(初出「古典日記」(『歴史と人物』昭和四十七年〜四十九年連載))参照。

十五 註六〇八、および「近江国の生霊、京に來たりて人を殺す語」(巻二七―第二十二)参照。

十六 藤本勝義『源氏物語の(物の怪)』(笠間書院、一九九四年)第三章参照。

(おかだ だいすけ 本学非常勤講師)